

知らなくても道を教えるコミュニケーション

野田 尚史

もう二十五年ほど前のことですが、大学四年生のとき、スペインに一年間、留学しました。大学の学部でスペイン語を専攻していたので、「スペイン語をきちんとやっから、専攻を日本語に変えよう」と思ったからです。

スペインに行く前に、「スペインで道を聞くと、間違っただ道を教えられることが多い」と聞いていました。「そんなこともあるのかなあ」と思い、スペインに行ってみると、実際、それは思った以上でした。

だれかに道を聞くと、かならず答えてくれます。「知らない」と答える人は、まずいません。でも、そんなにみんながどんな道でも知っているわけではないので、当然、間違っただのことも多いわけです。

人によっては、「それは警官に聞いたらいいよ。警官はそれが仕事だから、道を知らないといけない」とか、道を答えなくても、いろいろしゃべってくれます。

「間違っただ道を教えられたら、みんな困るだろう」と思うかもしれませんが、困っている様子はありません。観察していると、道を聞く人は、来る人、来る人に聞きまくりです。だれかから道を教えてもらってすぐ、その人に声が届くぐらいの所でも、次の人に聞いていることがあります。「さっき教えてくれた人に失礼だ」とは特に思っていないようです。

私のような東洋人は、すぐ外国人とわかるはずですが、スペインにいるあいだ、よく道を聞かれました。とにかくだれでもいいから、聞こうと思ったときにたまたま通りかかった人に聞くということもあると思います。東洋人が珍しく、ちよつと話してみたいと思つてという人もいたでしょう。

道だけでなく、時間もよく聞かれました。腕時計をしていない中学生ぐらいの女の子が多かったでしょうか。それくらいの子からは「ドゥーロくれない？」ともよく声をかけられました。「ドゥーロ」というのは、五ペセタ。当時、日本円で十五円ほど。今の日本の貨幣価値でいうと、三十円ぐらいでしょうか。

そういう経験をしているうちに、「道を聞くのはあい

さつのようなもので、正確な情報はおたがいあまり期待していない」ということがわかってきました。聞かれたほうも、ウソでもいいから答えるのは、「あいさつされたら、答えるのが礼儀だ」というのと同じことです。道を聞かれて「知らない」なんて答えたら、道を聞いた人に「なんて冷たいやつだ」と思われてしまいます。

普通の日本人は、「それにしても、そんなのは変だ」と思うでしょうが、表面的には違ってみえても、似ていることは、世界中、どこにでもありそうです。

たとえば、なにかプレゼントをするとき、「たいしたものじゃないけど」と言うのも、ウソと言えばウソでしょう。「すごいねえ」とほめられたら、そう思っていますが、「そんなことないですよ」と答えるのが礼儀です。

「謙遜するのと間違った道を教えるのは、まったく違う」と思いかもしれませんが、それは、「道を教えるのは情報のやりとりであって、あいさつなどは違う」という固定観念から抜け出せないだけだと思います。

スペインでも、みんなが間違った道を教えるわけではありません。ですから、何人かに聞いて、少し行ったら、また何人かに聞いて、とやっていけば、ちゃんと目的地

に着けます。

「とんでもない」とか「信じられない」とか思うことも、その社会で多くの人がしていることは、人間のすることですから、そんなに突拍子もないことはないはずです。そう思わないと、違う社会ではやっていけません。

でも、文化や価値観の違う人が接触する機会が多い時代になると、異文化の人にはわかりにくいことは、だんだん廃れていく運命にあるように思います。スペインでも、今は様子が少し違うかもしれませんが、日本でも、「なにもございせんが」と言いながら食事を出すようなことは少なくなってきました。

私もスペインから帰ってすぐのころは、道を聞かれると、あまりよく知らなくても答えていました。答えないと、その人に悪いような気がしてです。今でもそういう気持ちは少し残っていますが、「旅行者で、この辺はよく知らないんですが、たぶんあつちだと思えます、たぶん」というふうに、ちよつとトーンが落ちてきています。

それにしても、道を聞かれるのは、旅行先など、知らない所でいうことが多くありませんか？

(のだ・ひさし 大阪府立大学)